

集落支援だより

1月号(No.5)



賀
正

問い合わせ

岩国市中山間地域振興室

集落支援員 金丸 恵子

電話：0827-29-5015



明けまして

おめでと〜ございます

「新年に寄せて:」

令和5年、六呂師・叶木では様々な出来事がありました。サロンが再開して、人と食事に出かけるのも旅行も周りの目を気にする必要はなくなりました。ようやく日常が戻ってきた今日この頃です。

静かな日常生活の中、それでも少しずつ変化も見られます。二拠点生活をされている方の中には、より六呂師・叶木に比重を置かれてきていると感じる方もいます。実家を別荘のように改装し、友人を呼んですぐす。先祖代々の田んぼや畑を耕す。結果、集落の景観も守られています。

集落にゆかりのない方も豊かな自然に魅せられて畑を作ったり、移住を考えたりしている人もいます。

しかし、課題もあります。高齢の方の一人暮らしには限界があります。両親の介護のため集落に通う方が何人もいます。免許返納後の移動手段もネックになります。耕作放棄地は、獣害の被害をより拡大させています。

このような困難な状況の中でも、集落の活性化を願うリーダー役を担ってくださる方々と協力して、高齢者の方がいつまでも住み続けたいと思える地域を目指し、故郷を離れた方の帰省する回数が、一回でも増えるように、前任者から引き継いだ思いを重ねて、一歩ずつ進んで行きたいと思えます。今年もよろしくお願いいたします。

令和六年元旦

集落支援員 金丸恵子

元徴古館長 宮田伊津美さんに聴く…

六呂師・叶木面白歴史探訪



六呂師・叶木の面白い歴史や裏話はないかと、元徴古館長の宮田さんにお話を伺いました。

山間部に位置するこの地域は古代より狩猟と木地師として生計を立てていました。

奈良時代になると岩国（磐国）の名前が出てくるものに万葉集があります。

読み下し文では

「周防なる磐国山を越えむ日は手向けよくせよ荒しその道」（詠み人：少典山口忌寸若麻呂）
現代語訳としては「周防の国の磐国山を越える日には、神様にお供えを念入りにしましょう。
今から行く道はとても険しい道ですから。」となります。今から 1289 年前に詠まれた歌で、
欽明路峠は難所と云われていたそうです。



《江戸時代には…》

○殿様の猪狩には、六呂師、叶木、柱野、釜ヶ原の猟師の中から勢子や足跡から猪の所在をつきとめる者として動員されていました。明和 6 年（1769 年）正月 11 日の猪狩で手負いのまま逃げた猪に 12 日柱野山で叶木駄床在住の喜兵衛が出合い、数ヶ所のケガを負いながらも猪を仕留めました。78 歳の老人でもあり無比類の働きとして、特に褒美として死ぬまで米 8 斗が与えられたといいます。

○高畑には紙漉百姓が多くいたが、文化 7 年（1810 年）に紙漉数十軒が焼失する火事がありました。家を再建し、紙漉を続けるために刀祢（トネー村長）岡田延蔵が奔走し成し遂げた。褒美として 1 代惣年寄に任命されました。

○特産品として東郷の山より「砥」が産出され「六呂師砥」と呼ばれていました。又、鰻も他所のウナギよりも美味とされた。



「梅雨左衛門」伝承後記

梅雨左衛門の住処とされる大岩の名は「六呂師 鳥帽子岩」といいます。小さい白い蛇が梅雨の節分となれば岩の割れ目より岩上に出でて、梅雨が晴れば岩中に入りて常に出ることなしと伝わります。その姿は変わらず、小さい蛇のままのようです。現在は大内悟氏の地先と伺いました。

ある時、キセルの雁首を押し当てた通津村の馬喰は、帰り何か鞠の様な黒い丸いものがずっと先に通り越すのを見ました。火打岩峠まで来た時、自宅の上に石見太郎黒雲が有り、不思議に思い帰り着くと家内、子供もみんな家と共に流されて小石川原となっていたと恐ろしい伝説も残っています。江戸時代初期の文献（1668 年）では、どの村にも出てこない話です。

各地に類似の伝説が残り、近くでは岸根村、祖生村にも岩があり梅雨左衛門は居るそうです。

※江戸時代中心のお話になりましたが、日付まではっきり文献に残っているのには驚きました。

※参考文献：首詰記（広中役次著）・玖珂郡志・享保増補 村記